

簡便で標準化された栄養診断コード選択ツールの改訂と有用性の検証

清水亮¹⁾、齋藤長徳¹⁾

1) 青森県立保健大学

Key Words ①栄養管理プロセス ②栄養診断 ③栄養診断コード ④管理栄養士・栄養士

I. 緒言

栄養管理の工程として、日本では従来から広く普及している栄養ケア・マネジメントと、近年国際的に標準化が進められている栄養管理プロセスがある。栄養管理プロセスは、スタッフ間連携の円滑化や、栄養管理の科学的エビデンス蓄積への寄与などの効果が期待されている。日本において栄養管理プロセスを実施するには、従来の栄養ケア・マネジメントにはない栄養診断の方法を理解することが必須となる。

栄養診断は、Problem or Nutrition Diagnosis Label, Etiology, Sign/Symptoms (PES) 報告の形式で示す。さらに、既定された 70 の栄養診断コードから適したものを選択し、Problem or Nutrition Diagnosis Label (P) に用いることとされている。

令和 3 年に本研究室で実施した全国の病院を対象とした調査では、回答のあった 732 病院（回答率 29.5%）のうち、栄養診断を実施している施設は 13.8% であり、実施のために希望する支援として“栄養診断の分かりやすいマニュアル”を選択した施設が 73.9% であった。

これまでに本研究室では、栄養診断のマニュアルの一部として、平明で画一的な栄養診断コードの選択のために栄養診断コードフローを作成した。このフローについて青森県内の病院の管理栄養士、栄養士に評価してもらったところ、栄養診断実施における有用性や栄養診断のための分かりやすいマニュアルにおける必要性が示された一方、妥当で一致性の高い栄養診断コード選択のためのツールとしては改善が必要であるとの結果であった¹⁾。

II. 目的

栄養診断実施の一助とすべく改訂版栄養診断コードフロー（フローV2）を作成し、妥当で一致性の高い栄養診断コード選択のための有用なツールであるかを検証する。

III. 研究方法

1. フローV2 の準備

フローV2 は、改訂新版 栄養管理プロセス（木戸康博他編, 2022）に記載されている栄養診断コードの定義や症候、症状、原因に沿ったものになるように作成した（図 1）。A4 サイズ全 4 ページで、2 つの部分から構成され、第 1 部は摂取編とし、エネルギーや栄養素摂取量に関する栄養診断コード、第 2 部は原因編とし、第 1 部で導かれた栄養診断コードで示される栄養問題の根本的な原因の栄養診断コードを選択できるものとした。なお、前調査では、具

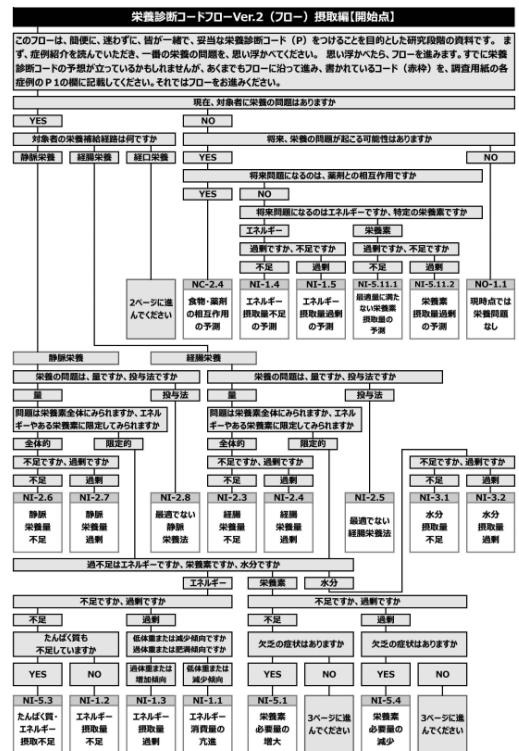


図 1. 改訂版栄養診断フロー 4 ページ構成。図は 1 ページ目を示す。

体的な栄養摂取量を把握していない場合に¹導かれる栄養診断コードや原因編のフロー内の設問文に課題が示されたため、フロー図の道程の再検討、原因編に具体例を加えるなどの改変をした。

2. フローV2 の評価

【調査対象】日本病院会ホームページ会員一覧に掲載されている 2516 病院より 3 分の 2 を無作為抽出した 1678 病院の管理栄養士・栄養士の長とした。【調査方法】研究協力の依頼文とフローV2 並びに質問紙を郵送し、調査協力に同意する場合にのみ質問紙に必要事項を記載して返信するように依頼した。【調査期間】2023 年 3 月 6～31 日【調査項目】模擬症例 (3 例) に関して回答者が選択した栄養診断コード、栄養診断コードを選択した根拠、栄養の問題点の原因、フローV2 により導かれた栄養診断コードおよびフローV2 の評価とした。加えて、回答者の所属する病床の特徴、病床数、管理栄養士・栄養士数、栄養指導および栄養管理の記録方法、栄養診断の実施状況とした。【集計解析】解析には IBM SPSS statistics26 (日本アイ・ビー・エム株式会社) を用いた。【倫理的配慮】青森県立保健大学研究倫理審査会 (承認番号 22078) の承認を受けて実施した。

IV. 結果と考察

3 月 29 日現在の回答施設は 199 病院 (11.9%) であった。集計途中の 100 病院分の結果であるが、模擬症例 3 例に関して、想定した栄養診断コードに導かれた割合 (一致率) について報告する。フローV2 摂取編の一致率は、症例 1 で 16.2%、症例 2 で 70.1%、症例 3 で 40.8%、原因編では 3 症例について 70%を超えていた (図 2)。前調査の課題をふまえた改変により、フローV2 原因編は、一致率の改善がみられた。一方、フローV2 摂取編の一致率は前調査と同程度もしくはそれ以下であり改善がみられなかった。集計経過の考察ではあるが、フローV2 摂取編は、全調査において栄養摂取量を把握していない場合の症例に関して課題があり、改変を検討する中で、フローの階層が増えたとともに、設問文に定義を必要とする曖昧な表現が使用されたことが原因である可能性が考えられた。

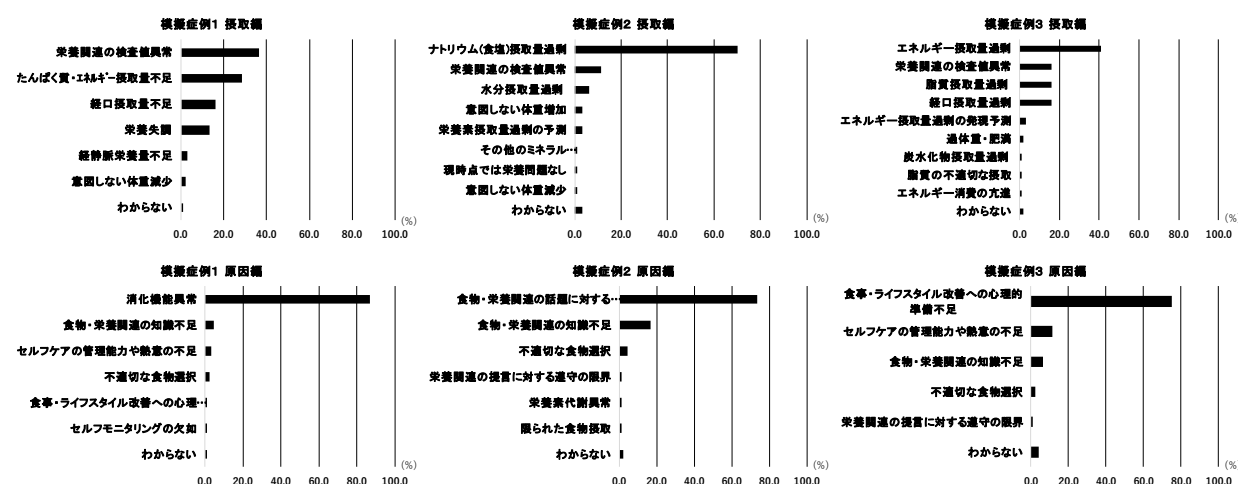


図 2. フローV2 を用いた場合に、各模擬症例において想定した栄養診断コードに導かれた割合

V. 文献

- 1) 清水 亮 他. 栄養管理プロセスにおける実用性のある栄養診断コード選択ツール開発の試み. 栄養学雑誌 80 巻 1 号 40-50, 2022

¹ *連絡先: 〒030-8505 青森市浜館間瀬 58-1 E-mail: r_shimizu@auhw.ac.jp